

ビートアーミルア剤 ヨトウコンー S	取扱メーカー： 協友アグリ，信越化学 原体メーカー： 信越化学
成分： （Z，E）-9,12- テトラデカジエニル＝アセタート…53.7% （Z）-9- テトラデセン -1- オール…26.7%	性状： 淡黄色澄明油状液体（ポリエチレン細管に封入） 毒性： 普通物 消防法： 第4類・第3石油類（非水溶性）・危険等級III

【品目特性】

- シロイチモジヨトウの性フェロモンを有効成分とした交信攪乱剤で，交尾行動を阻害し，次世代幼虫の増殖を抑制することにより被害を減少させる。成幼虫に対する誘引・殺虫作用は示さない。
- 一般の殺虫剤とは作用機作が異なるので，各種薬剤抵抗性のシロイチモジヨトウにも有効。
- シロイチモジヨトウのみに作用し，天敵を含む他の生物及び自然環境に影響を与えない。
- 有効成分はポリエチレンチューブの壁面から徐々に放出され，約3カ月間持続する。
- 広い面積で集団使用すると，より安定した効果が得られ，さらに連年使用することにより密度抑制効果が高まる。
- 有効成分の特性は参考資料の「有効成分特性一覧表」を参照。

【使用上のポイント】

- シロイチモジヨトウの発生初期から収穫期まで連続的に広範囲な地域で使用する。
- 露地では最低3ha以上が望ましく，10ha以上であれば問題なく使用できる。また，周囲が囲まれているなどフェロモンが流れにくい条件下では3ha以下でも使用できる。しかし，一般的には

3ha程度の場合は周辺部の効果に問題を生じることがあるので，周辺部に追加処理が必要である。

- 設置場所は，露地では作物の高さと同じ位置に，ハウスでは天井付近の上方とする。
- 殺虫効果はないので，使用中にシロイチモジヨトウの幼虫密度が増加した場合は殺虫剤を使用する。
- シロイチモジヨトウ以外の害虫には効果がないので，他の害虫が発生した場合は殺虫剤を使用する。

【薬効・薬害等の注意】

- 露地の場合の標準使用量は10a当たり100～150本であるが，害虫密度の状況や圃場の立地条件，周囲の発生源の有無，気象条件などを考慮し，条件がフェロモンにとって好ましくない場合は所定の範囲内で多めの量を使用する。
- 発生密度が高い場合には効果が不安定になることもあるので，他の薬剤との併用処理，誘蛾灯の設置，飛び込み防止ネットの設置など害虫密度を低くする処置を行う。
- ハウスでの使用に当たっては換気状況，特に空気の動きを考慮し周辺処理を行う。
- 開封したまま放置すると薬剤が揮散するので，使用するまで密封したまま低温（5℃）で保存し，使用直前に開封して使いきる。

【適用と使用法】

作物名	適用場所	使用目的	適用害虫名	使用時期	10 a 当り 使用量	使用方法
シロイチモジヨトウが加害する農作物	シロイチモジヨトウの加害作物栽培地帯	交尾阻害	シロイチモジヨトウ	シロイチモジヨトウの発生初期～終期	露地	100～500本（20cmチューブ）
					ハウス	100～140m（20cmチューブの場合は500～700本）

作物上に支柱などを用いて固定する。